実写ドラマ（学園忍者もの）　３０分

風魔の小次郎

第十三話（最終回）　「あばよ！風の中へ　の巻　（仮）」

脚本　大岡俊彦

原作　車田正美　「風魔の小次郎」（集英社）

登場人物

小次郎（１６）

竜魔（１８）
劉鵬（１８）
霧風（１７）
小龍（１７）

北条姫子（１６）
柳生蘭子（１７）

飛鳥絵里奈（９）

壬生攻介（１７）　１２話との調整によっては、回想のみ
夜叉八将軍・陽炎（１８）　（回想のみ）
夜叉姫（１８）

看護士りほ（２２）
医師（５０）

飛鳥武蔵（１７）

○轟く雷鳴の重たい空

誠士館、校庭（１２話の最後とで調整）

虫の息の壬生、武蔵に黄金剣を手渡す。武蔵、抱きかかえる。

壬　生「伝説の聖剣、長刀黄金剣…。そもそも長刀使いのお前にこそふさわしかったのかもしれん…」

武　蔵「壬生…」

壬　生「武蔵。これでも結構満足しているよ。これはお前の剣だ。我が友よ」

武　蔵「友の剣、受け取った」

武蔵、黄金剣を手に取る。壬生、息をひきとる。満足そうな死顔。突如、黄金剣がひびわれ、脱皮するかのごとく表面がはがれおちてゆく。中から黄金に光り輝く、真の黄金剣が現れる。武蔵の両の瞳が金色になる（以降ずっと）。風林火山をあらためて構える小次郎。

○病院、中庭

咳をする絵里奈、パジャマに上着をひっかけたまま、弱々しくケータイを取り出してみている。看護士りほ、大慌てで走ってくる。

りほ「ダメじゃない絵里奈ちゃん！　こんな冷えこんだ日に外になんか出ちゃ！　明日は十才の誕生日なんだから、あったかくしてなさい！」

絵里奈「だって病院内はケータイ禁止でしょう？　医療機器が誤作動しちゃタイヘンでしょう？…小次郎からいつメールが来るか、もう待ってられないんだから…（ひどい咳）」

りほ「（手をあてて）熱じゃないの？　とにかく病室まで戻って！」

絵里奈「（鉛色の曇り空を見て）…小次郎…お兄ちゃん…今、どこ…？」

○誠士館、校庭

対峙する小次郎、武蔵。

小次郎「姫子を返せ！　姫子に何かあったらタダじゃおかねえぞ！あの子がどれだけの自分に抱えきれない思いでがんばってて、どれだけ世の中の事を考えているかなんか、オマエら知りもしないで！　彼女の心か体を少しでも傷つけてみろ！　絶ッッッ対に許さねえ！」

○イメージ（聖地）

聖地にささる、十本の聖剣（風林火山、黄金剣以外はシルエット）。

N　A「天に十本の聖剣あり。この世に神にも等しい力を振るい、大地を揺るがす伝説の聖剣があるという…その力正義なる者が持てば大地に希望の風をよびおこし…邪悪なる心の者つかさどればこの世に暗雲をまきおこす…」

小次郎の持つ風林火山、武蔵の持つ黄金剣。

○誠士館、校庭

N　A「今、はるかなる時を越え、そのうち二本が現代にあいまみえた。ひとつを剛刀・風林火山。ひとつを長刀・黄金剣という」

小次郎。金の瞳の武蔵。

小次郎「ゆくぞ飛鳥武蔵！！」

武　蔵「ゆくぞ風魔の小次郎！！」

●オープニング（画は今までのスーパーダイジェスト）

○タイトル　「最終話　あばよ！風の中へ　（仮）」

○誠士館、校庭

小次郎と武蔵のチャンバラ。

小次郎「夜叉一族はもう全滅だろう？　お前一人で何が出来るッ？」

武　蔵「オレが引き受けた仕事は白凰学院を潰す事…その前に立ちふさがる小次郎、貴様ら風魔を倒す事」

小次郎「姫子をどこへさらった！？　姫子を返せ！！」

激しいチャンバラは続く。武蔵がテレポートでかわしても、小次郎は的確においつく。

武　蔵「バカな…！瞬間移動のこのオレの本体にピタリとついてくるとは…風林火山の前ではこの武蔵のサイキックも封じこめられるとでもいうのか…！」

○回想、ある中学校の廊下

中学時代の武蔵、一人帰ろうとすると周りから罵声を浴びせられる。

生徒１「オイ飛鳥！　金色の目でこっちを見るんじゃねえぞ！死んじまうからな！」

生徒２「こっち見んなっつってんだろ！バケモノ！　オレを殺す気か！」

生徒３「ぐわッ死ぬッ（笑）　オイお前（女子生徒に）飛鳥と見つめあって来いよ！」

女子生徒「ヤだよ死んじゃうよ！　金の目見たら殺されちゃうんだよ！」

生徒１「バケモノ！　こっちを見んじゃねえ！」

生徒２「バケモノ！」

武蔵、目をつぶる。あけると金色の瞳。うつむいたままの武蔵。

全　員「バケモノ！　バケモノ！　バケモノ！　バケモノ！」

○回想、誠士館、総長室

夜叉姫「そのあなたのバケモノのような能力を私は高く買ったのですよ、飛鳥武蔵」

武　蔵「…（瞳は黒）」

壬　生「一般社会にも戻れず、かといって忍びの世界に属することもない男…つまりは（剣を出し）これだけで生きてきた男ということではないか…気に入った」

握手を求める壬生。

壬　生「夜叉一族、壬生攻介。誰よりも切れる剣の男と自負している。…いや、（剣を見て）コレに言葉は必要ないな。立ち合ってみよう（構える）」

武　蔵「オレはなるべく自分を高く売りたい。…本気でいいか？」

壬　生「（微笑む）お前となら、本音で話せる気がするぞ」

○回想、病室

寝ている絵里奈の手を握る武蔵。

医　師「脳膜内複合水腫…。この年で発病したら、大人になるまでは生きられないでしょう」

○（元に戻り）誠士館、校庭

激しく続く小次郎と武蔵のチャンバラ。

武　蔵「化物でもなんでもいい…！　絵里奈、お前の為なら、お前を一日でも長く生きさせる為なら…お兄ちゃんは魂はおろか命さえも悪魔に売るぞ！！」

二人の闘いは、入り口のギリシャ風の柱の所へ。

柱をはさんで対峙する二人。

武　蔵「この世に貫けぬものはなし黄金剣！！」

その柱を貫通する突き。後ろの小次郎、間一髪よける。

小次郎「この世にブッタ斬れぬものはなし風林火山！！」

その柱をまっぷたつに斬る。二人、離れる。その柱、ゆっくりと音を立てて階段を転がりはじめる。

小次郎「疾きこと風のごとく！」

武蔵に速い突き。ほおの皮一枚をかすめる。反撃しようとする武蔵だが、

小次郎「徐かなること林のごとし！」
背景の林に風林火山が浮かんでいるだけで何も見えない。
武　蔵「どこだ…やつの姿が…よく見ろ、小次郎は風林火山の後ろにいる筈！」
小次郎「侵掠すること火のごとく！」
風林火山から火が出る。烈火のごとき連続攻撃。
武蔵をおいつめる。
武　蔵「かかったな小次郎！」
さきほどの柱が転がってくる。小次郎、その場を動かずニヤリと笑い、片手で風林火山を振る。柱、粉々に砕け散る。
小次郎「動かざること山のごとし。伝説の剛刀、これが風林火山だ」
武　蔵「一番初めに感じた違和感の正体はこれだったのか…風魔の小次郎、夜叉一族を壊滅においおとし、風林火山を使いこなすまでに成長するとは…あの時成長の芽をつんでおくべきだったか。黄金剣の力、見せてやる」
武蔵の金色の瞳が光る。
小次郎「な…なにい！？　これは幻覚か！？」
巨大な津波が押し寄せてくる。
武　蔵「小次郎、死に様はどっちを選ぶ。黄金剣が招いたこの大海にのみこまれるか？　それともこの黄金剣に貫かれるか！？」
小次郎「くっ！　うなれ風林火山よ！　おおいなる風を巻きおこせ！！」
小次郎、風林火山を一閃。すさまじい風が舞う。
武　蔵「う…バ…バカな…！！　う、海がまっぷたつに割れた！」
巨大な津波が、小次郎を中心に割れてゆく（十戒のように）。

○病室

絵里奈は寝ている。看護士りほが窓の外を見て、

り　ほ「まあ…冷えると思ったら雪…。絵里奈ちゃん、明日はつもるといいわね。…絵里奈ちゃん？」
絵里奈、苦しそう。りほ、手をあてて
り　ほ「すごい熱！！　さっきまで元気だったのに…。しっかりするのよ絵里奈ちゃん！　すぐ先生を呼んでくるから！！」
絵里奈「お兄ちゃん…武蔵にいちゃん…」

○回想、誠士館、総長室

陽炎と武蔵。

陽　炎「人類は誕生以来、ずっと人の殺し方について考えてきた…石、骨、青銅器、弓矢、ミサイル、戦車…最終的に人類はひとつの結論にたどりついたのだよ。地球を５３０回以上滅亡させるだけの核という武器をもったときにね。…強力すぎる刃（やいば）同士は、相討ちになる」

○誠士館、校庭、雪

雪がふってくる。小次郎と武蔵のチャンバラ。武蔵の打撃が当たり出す。
小次郎「くっ…聖剣としての力は対等な筈だ…」
武　蔵「何かカン違いをしていないか？　聖剣の力は対等でも、小次郎、お前とオレの忍びとしての力は対等ではない…」
小次郎「くっそお！！」
武　蔵「飛龍覇皇剣！！」
小次郎の胸を、ついに武蔵の剣が貫く。
蘭子、姫子、竜魔、劉鵬、霧風、小龍が来る。
蘭　子「小次郎！　姫子さまは無事助けた！！」
剣をぬく武蔵。倒れる小次郎。雪。姫子、小次郎の胸から溢れる鮮血を見る。
姫　子「小次郎！　小次郎！　小次郎！　小次郎！」
額から流れる武蔵の血（小次郎も一発入ってい

た)。よろめく武蔵。

小次郎「へへへ…オッケー。オレのメルヘンは無事だったってことね？　武蔵よォ、オレの心臓には毛が生えてるんだ。その毛一本分助かったぜ」

立ち上がる小次郎。鮮血が吹き出す。構える武蔵。

姫　子「小次郎！　やめて。もうやめて！！」

小次郎「忍びって何だろう。俺、ずっと考えてたんだ。忍びの家に生まれたから忍びとして生きていくのかって。オレ、ぶっちゃけ竜魔のあんちゃんが嫌いだった。自分の感情を表に出さず、仕事仕事仕事マシーン。…なんて冷たいんだろうってずっと思ってた。でも、みんなが死んでいって分かったんだ。いちいち感情にとらわれてたら忍びっつう仕事はできねえんだって」

竜魔。姫子、蘭子。

小次郎「…前にさ、蘭子は姫子ちゃんが北条の人間でなかったとしても彼女を助けたい、って言っててさ、オレそれで納得したんだよ。忍びは、自分の幸せでなく他人の幸せの為に死ぬって、昔からあんちゃん達に言われてた意味がようやく分かったんだ」

姫　子「…」

小次郎「オレ、姫子の為ならこの命使ってもいいと思う」

姫　子「…やめて小次郎！　もうやめて！！」

武　蔵「…まさか相討ち狙いか…！」

小次郎「忍び同士の私闘は相討ちになる、ってそういえば習ったな。だけど、やってみなきゃわかんねえぜ？…死ぬのは武蔵、お前だけかもよ」

武　蔵「小次郎、とどめだ！」

その二人の間に、絵里奈が歩いてくる。

武　蔵「バカな…！」

小次郎「絵里奈！！」

雪の中を、絵里奈は裸足で歩いてくる。

●CM

○病室

降る雪。苦しむ絵里奈。看護士りほ、医師は祈るしかない。

○誠士館、校庭、雪

冷たい雪の中を、絵里奈は裸足でパジャマ姿のままやってくる。驚く小次郎、武蔵。

小次郎「絵里奈…なんで…」

武　蔵「お前…病院を抜け出して…？」

絵里奈、竜魔たちを通り過ぎる。竜魔たちの体をすりぬけてゆく（つまりこの世のものではない）。全員その意味を悟る。

絵里奈「武蔵おにいちゃん。風の使者の小次郎。もう闘わないで」

小次郎「お兄ちゃんって…武蔵、お前が絵理奈の大好きなこの世で二人きりのお兄ちゃんだと…！？」

武　蔵「小次郎！　まさかお前が絵里奈の言っていた、俺よりも大切な友達？…」

絵里奈「そうだよ。三人で会うのははじめてだね。どっちかがいっつも忙しくってね。あーあ。三人で仲良くお話ししたりお茶のんだりしたかったなあ…」

小次郎「そんな…そんなバカな…」

武　蔵「小次郎…なぜ、貴様が…なぜ貴様が絵里奈を！！」

絵里奈「もう、ケンカしないでよ。今日はふたりにお別れをいいにきたの。はじめて三人で会えたのに、最初で最後になっちゃったけど」

武　蔵「お別れ…まさか！」

絵里奈「私の体、今夜でダメみたい」

武　蔵「絵里奈！」

絵里奈「小次郎、ごめんね。メールの返事、だいぶたまってたかも。結局小次郎予測変換覚えきれなかったね。新しくメールしようとしてたら倒れちゃって、私の体は今高熱中」

小次郎「絵里奈！！」

絵里奈「お兄ちゃん、今までありがとう。一杯お金を稼いでくれて、私に嫌な思いをさせないように頑張ってくれて。絵里奈は幸せでした。でもごめんなさい。もう会えないです。…これ以上入院費を稼ぐ必要はなくなるから、もう闘わなくていいと思う。これからは、自分の力を自分の為だけに使って下さい」

武　蔵「待て…絵里奈、いっちゃ駄目だ！　お前が死んだらオレは何の為に生きるんだ！？　二人で世間の冷たい風に耐えてきたじゃないか！？」

絵里奈「世の中には、冷たい風ばかりじゃなくて、暖かい風が吹く事もあるんだよ。小次郎がそれを教えてくれたの。ね？　小次郎」

小次郎「絵里奈死ぬな！　いますぐお前の所にいってやる！　新しい手品覚えたんだぜ？　まだ話してない事いっぱいあるぜ！？」

絵里奈「（笑）…私と小次郎は、精神年齢が近かったから、いい友達だったよね。…お兄ちゃんとは結婚できないから、小次郎と結婚したかったな。…小次郎、あそんでくれてありがとう」

武　蔵「絵里奈…絵里奈！！」

武蔵、絵里奈を抱きしめる。だが霊体の為すりぬける。絵里奈、武蔵を触ることのできない体で抱きしめる。武蔵の懐から、プレゼントが落ちる。アンティークものの懐中時計である。

武　蔵「お前はまだ9年しか生きてないじゃないか！　あと十年生きたいと言っていたじゃないか！　絵里奈死ぬな！　お兄ちゃんをひとりぼっちにしないでくれーーッ！！」

懐中時計の針が止まる。絵里奈、ゆっくりと消えていく。小次郎に目をあわせながら、「オレ達、トモダチ」のゼスチャーを残して。

○病室（外は雪）

り　ほ「絵里奈ちゃん！！　絵里奈ちゃん！！」
絵里奈の体につながれた医療機器が、絵里奈の死を告げる。がっくりとする医師。微笑みながら横たわる絵里奈。
武蔵の声「絵里奈ァァァァ――――――――――！！」

○誠士館、校庭、雪

呆然としてい武蔵。小次郎（胸からは出血）。
小次郎「そうか…武蔵は絵里奈の為に傭兵として闘っていたのか…夜叉一族に協力して…」
武蔵、血染めの黄金剣を構える。
竜　魔「よせ武蔵！　もう戦いは終わった！　夜叉一族に戦う力は残されていない！　我々は姫子さまを取り戻した！　誠士館は負けたのだ！！」
ゆっくりと間合いをつめる武蔵。
武　蔵「絵里奈は死んでない。早くお前らを倒して絵里奈のもとへ帰らねば。オレは毎日そうやって生きてきた」
小次郎「よせ！　武蔵！！　絵里奈は…絵里奈は死んだんだ！」
武　蔵「オレは戦いの中でしか生きられない」
×　×　×
フラッシュ。化物！となじられるシーン。
×　×　×
武　蔵「他の生き方は出来ない。他の生き方は知らない。オレはオレを高く売るんだ。風魔一族よ、滅亡せよ！！」
小次郎「決着をつけてえのか武蔵！！」
武蔵、無言で前に出る。
小次郎「つけねえ限り前にはすすめねえってのか！！」
武　蔵「飛龍覇皇剣！！」
小次郎「相討ちになるかどうか…たのむぜ風林火山……竜巻起こすぜ！　風魔烈風！！！！」
風林火山を一閃、竜巻が武蔵を襲う。その暴風を割って、武蔵が踏込んでくる。突いてきた黄金剣の切っ先を、真正面から小次郎が唐竹割りでたた

き落す。地面に落ちる黄金剣。返す刀の抜き胴で武蔵の肋骨を砕く小次郎。ひざまずく武蔵。

武　蔵「もう…俺には何も残っていない…。俺の負けだ。とどめをさせ、小次郎」

小次郎、風林火山を構え、振り下ろす（音だけで武蔵はこのとき見せない）。

○誠士館、総長室

扉をあける小次郎。夜叉姫はナイフで自害していた。チェス盤に飛び散る血。クイーンとナイトだけが残っていて、他の駒は全て倒れていた。

小次郎、風林火山を振る。後ろの夜叉面、まっぷたつに崩れ落ちる。

○誠士館、校庭、雪

一人帰ってくる小次郎。迎える竜魔、劉鵬、霧風、小龍、蘭子、姫子。

小次郎「終わったな…」

竜　魔「なぜやつの首をとらなかった？」

ひざまづいたままの武蔵（顔はみせない）。

竜　魔「今とっておかねばやつの心がよみがえった時、風魔にとってふたたび強大な敵としてたちふさがるかも知れんぞ」

小次郎「その時はまた命をはってでもとるさ…」

去ってゆく小次郎達。

残された武蔵、顔をあげる。黒い瞳に戻っている。

目から血が流れている。

武　蔵「この世に斬れぬものなし、風林火山…。サイキックの力も斬るというのか…」

去ってゆく小次郎の背中。

武　蔵「一般社会に、戻れと…？」

武蔵と目をあわせた直後、倒れこむ小次郎。蘭子

と姫子、しっかりとささえる。

○白凰学院、桜散る

タイトル「春」

○同、総長室

スーツ姿の姫子（１７）、たまった書類に赤ペンを入れている。

姫子ＮＡ「あの雪の夜から三ヶ月。誠士館グループと言われた支配体制も今では夢のようになくなり、誠士館高校は廃校になりました。もうすぐ校舎の解体工事がはじまると聞きます」

机の上の記念写真（姫子、蘭子を中心に、小次郎、竜魔、劉鵬、霧風、小龍）を見て。

姫子ＮＡ「蘭子さんはこの春白凰学院を卒業し、アメリカに旅立つ為英会話学校に通っています。私はと言えば、卒業後本格的に総長になる為に、学業の合間に学校経営の勉強です。白凰学院も入学志願者が増え、少しずつ日常が戻ってきています」

コンコンとノック、蘭子（私服）が入ってくる。

姫　子「蘭子さん！　おひさしぶり」

蘭　子「グンモーニング白凰学院の女子。おっとこれは英語じゃねえな。…バカのクセがうつったぜ（と手土産のお菓子を出す）」

姫　子「…ふふふ」

二人とも、あいている窓を見る。風がやわらかく入ってくる。柔らかい光。

姫子ＮＡ「平和が戻ってきたのは嬉しいけれど…あの夜から、私の心は戻ってきていない気がします」

蘭　子「あの窓から…」

姫　子「またいつか彼が入ってくる気がして、あけたままにしてあるんです」

○白凰学院、校門前（冬の日に戻って）

帰り支度をした小次郎、竜魔、劉鵬、霧風、小龍。
見送りに来た姫子、蘭子。

小次郎「じゃあな！　夜叉一族の奴らはオイラがけちょんけちょんにしてやったし、あとは風魔の里に戻って風呂入って寝るだけだぜ！」

姫　子「（泣きそう）」

小次郎「そんな泣きそうな顔するなよ姫。また困ったことがあったらいつでも来てやるぜ？　もっとも、また困ったことになるのもウンザリだろうけどな！」
小次郎、スタスタと歩いていく。

蘭　子「（追いかけようと）」

竜　魔「…俺達はいつでも風魔の里にいる。（眼帯を外し）これ、あんたに持ってて欲しい」
両の目で蘭子を見る竜魔。

小次郎「（遠くから）姫子！　あと二年たったら高校卒業だろ！？そしたらオマエ総長代理の代理がとれて、白凰学院のホントの総長だろ！？　そんときには総長サマの顔をおがみに来てやるぜ！　どんな顔して総長やってんのかな！！」

姫　子「バカ！　…バカ！　なんでそんな顔してんのよ！　小次郎のバカ！（涙が止まらない）風魔の里を案内してくれるって言ったじゃない！…もう風魔の里になんか一生いかない！！」
くるりと背を向ける小次郎。帽子で隠そうとするが、本当は泣いている。

竜　魔「あいつは…人の懐にあんなにも飛び込んで、世の中を変えていく。小次郎なら、新しい形の忍びになるかも知れません」

蘭　子「…」

霧　風「それでは…」

小　龍「風魔は…」

劉　鵬「里に戻ります」

突風が吹く。蘭子、姫子、追いかけようとするけど強風で無理。風魔たちはもういない。
姫子、風であおられて膝をつきそうになるけど、自力で立ち上がる。気づくと小次郎が彼女を後ろで支える体勢になっていた。風の中、一瞬、だが永遠に見つめあう二人。
迷った末、彼女の額にキスをする小次郎。くるりと背を向けて走っていく。風の中へ。光の中へ。

小次郎ＮＡ「その脚力は一日数千里を走り　その耳は三里先におちた針の音さえもききわけ　闇夜でも千メートル先の敵を見きわめる目をもち　動けば電光石火　とどまれば樹木のごとし　あと、つけくわえるなら、暖かい風を吹かせる…それが、風魔だ！！」

走る竜魔、劉鵬、霧風、小龍、そして小次郎。

『完』

●エンドロール（最終回特別バージョン。名場面集）